はじめに

情報処理センター所長　**松戸武彦**

ＩＴ革命と言う文字が、ちまたを疾風のごとくめぐっている。内容は必ずしも定かでないが、とにかく多くの人々の関心を惹くことらしい。ブームというものがおおかたそうであるように、この言葉も内容の吟味よりもその「華やかさ」が先行しているクチなのだろう。しかし、奈良大学の情報処理センターはこのような「浮ついた風潮」に戦いを挑まなければならない。いま、確かに私たちの生活はプリミティヴな意味でＩＴ無しには成り立たないようになっている。ならば、大学に籍を置くものならば、その構造を読み解く力をつけなければならないことは明らかである。その意味で、社会学部と文学部という文系の学部からなる大学の情報処理センターの使命の一つに、コンピュータを中心とする情報処理機器を日常生活の中で使いこなし、日常生活をより豊かにさせる道具として接する力を付けていく点にあることはまちがいない。

私が大学に入学してコンピュータなるものに接し始めてから30年になる。当時はカードを読みとる方式で何十枚というカードを使い、プログラムを書き、コンマ一つの間違いで１週間の努力が水泡に帰す時代であった。それからすれば、クリック、クリックですいすいと目的を達成していける「今」という時代と技術に感謝したい。社会調査実習の授業でいとも簡単に複雑な表の張り付けを学生達がこなしているのを見ると後発ユーザーの利をまざまざと知らされる思いにとらわれる。私の惨めな初期コンピュータライフに比べて本当にうらやましいのだ。

しかし、同時に情報処理は処理技術とともにその内容が問われていることも確かである。コンテンツのつまらないサイトはたちまち見捨てられるのだ。その意味で情報処理センターもおもしろいコンテンツの発信基地にならなければならない。ここで「おもしろい」とはいろいろな意味内容を含んでよい。

こうした文脈から、今年とてもうれしいニースがあった。本学有志が運営する「奈良発研究の森、Ｑ＆Ａ」というインパク（インターネット博覧会）参加サイトが、月間編集長賞をいただいたことである。そして、なによりも誇れるのは、いただいたすばらしい表彰状だけでなく、本学がおもしろいコンテンツを発信しえたという点である。すでに、このサイトを通じて全く存じ上げなかった方々との交流もはじまっていると聞く。奈良大学にとってかけがいのない宝になっていく予感がする出来事である。